生物資源学類プログラム　評価委員　講評

評価委員
あびこ型「地産地消」推進協議会会長、筑波大学元教授　遠藤織太郎
NPOつくばアーバンガーデニング事務局長　井口百合香

総　評

本プログラムは大学教育と社会貢献を見事に融合させた取組みであり、大学教育に新たな風を吹き込むことが期待できる。特に学生が得た成果が大きく、アルバイトなどによる地域との単なる関わりではなく、自分が専攻している学問を通じて地域と関わったことで、その分野についても見識が広がり深まる一方、学ぶことの意味についても考えるきっかけとなり、得るところが大きかったことがわかる。学生にとっては初めての本格的な教育・社会体験を通じて、彼らの人間力が養われ、総合的に科学する力を身につけられたことが活動全体を通して感じとれる。

参加した市民に対して

市民の成果発表を通して、筑波大学に対する市民の期待と興味、関心の強さ、生き甲斐、生活の充実感が得られていることがよくわかった。市民が大学に親しむきっかけとなり、向学心が満足させられたといえる。市民との交流は、大学では得られない視点やニーズを通して学生に大きな刺激を与えた。参加した市民が果たすことを期待されている地域貢献については、現状ではややハードルが高いように思われた。

参加した学生に対して

参加した学生と話して、これまでの大学教育にはなかった新しい教育・社会体験を通じて真に役立つ逞しいリーダーになる能力と資質を身につけた人材に育っていることがわかった。年齢や立場の違う人との出会いや交流が意味のある体験となったことは確かだと思う。また、市民の学びを支えるということが、自らの学びにつながったことも確かである。

大学への期待について

大学教育と社会貢献を両立させるためには、長期的視野にたった持続性のある体制の確立が必要である。地域社会は大学に対して「豊かで住みよい大学のある街づくり」を求めている。本プログラムはその期待に良くこたえているものだと感じるが、街づくりは1、2年で終わるものではなく、継続性が問われている。品格のある街、名だたる大学、それを満たすような伝統形成に繋がる活動にしていただきたい。「市民を通じて地域に貢献していく」には大変な労力が要るので、教員たちの過重な負担なしにそれができるためのシステムが必要だと思う。今回の体験をもとに、効率よくそれができるシステムの構築を目指されることを望む。